

巻頭言

「ヒマラヤ学誌 13号」をお届けする。

ヒマラヤ学誌 13号では、人間文化研究機構・総合地球環境学研究所「高所プロジェクト」研究班（人の生老病死と高所環境—「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応、プロジェクト・リーダー：奥宮清人）（以下、「高所プロ」と略）から「インド・ヒマラヤ」特集として18編の原著とエッセー、ブータン特集として7編、雲南懇話会から5編の論考を掲載させていただいた。

「高所プロ」ではこれまで、ラダーク、アルナーチャル・プラデッシュというインド・ヒマラヤ、そして中国青海省に住む高所住民に関する調査から多くの医学的ならびに生態・文化的な知見を得てきた。ラダークの高齢者住民に関する学術的な知見と雲南懇話会寄稿のザンスカール山群の未踏峰を探索・紹介いただいた阪本論考は、同一地域における「学術」と「探検」のそれぞれの視座を描いたもので、本誌にふさわしい編集と考えている。

また「高所プロ」は23年度から、ブータンにおける地域高齢者のヘルスケア・デザインを構築する取り組みを本格的に始動させている。「高所プロ」は24年度をもって終了するために、緒についたブータン・ヘルスケア計画を今後末永く継承・発展してゆくために、京都大学ブータン友好プログラム（Ku-Bhutan）とも連携する態勢を構築し、本号でも、Ku-Bhutanには編集助成と寄稿をいただいた。その経緯は、本誌「ブータン特集」の「報告」に詳述されている。

国際山岳連名（Union Internationale des Associations D'Alpinisme: UIAA）医療委員会と（社団法人）日本山岳協会・科学委員会から期待されている Non-Caucasian と High Altitude に関する考察も、主として「高所プロ」の知見をもとに、本号でも引き続き、Editorial として概要をまとめた。

「高所プロ」や ASH、Ku-Bhutan、AACK などに集うメンバーは、山岳環境の健全な保全と高所地域住民の健康などに関するあらゆる要素、すなわち持続性、復元力、多様性、生産性が、機能して発展できるようなシステムを考究してきた。そのメカニズムを解明してゆく過程で、自然が私たちを大きく越えた存在であることを改めて認識している。自然のやりかたを妨げないことが、人間と環境との双方にとって、将来の鍵をにぎっているように思われる。私たちは自然のすべてを理解することは決してないかもしれない。しかし、長い進化の過程を通じて、自然と生物、そして人間が調和できる生態系が構築されてきたこと、その生態系の庇護のもとで暮らし働くすべを学ぶことはできる。かつては、山岳住民の多くがそのような生活を営んできた。今も将来も、私たちに同じことができない理由はなさそうである。自然との調和ある生き方を模索することは、略奪的で破壊的な経済システムに反省を求め、真の代替手段の創造に未来を切り拓く可能性がある。このような視点こそが、自然の劣化をくい止め、むしろ自然の回復に貢献できる方向であろう。

学際的な本誌を通じての、いっそう活発な議論を期待するものである。

編集委員を代表して：奥宮清人・松林公蔵